

魔法先生ネギま！大空、来る！！

紅彦

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

虹の代理戦争を終え、騒がしいが楽しい日常を取り戻した沢田綱吉。しかし、彼にはまた新しい騒動が舞い込んできた。

その騒動とは—— お見合い！

このお見合いを期に再び彼の波乱万丈な生活が始まる！

ということとで家庭教師ヒットマンとネギま！のクロスです。何でも許せる方はどうぞ！

目次

お見合い、来る！

プロローグ ことの始まり | 1

第1標的 ボンゴレ side 来る！ | 5

第2標的 ネギま！ side 来る！ | 12

お見合い、来る！
プロローグ ことの始まり

『あの子に勅命を送ったよ』

『すまないのう、巻き込んでしまつて』

一面ガラス張り窓、外には綺麗な満月が輝いている。その満月を背に老人が一人。我儘を聞いてくれた古い友人に謝罪を送る。

『なに、構わないよ。君と私の仲じゃないか』

『そう言ってくれるなら有難い』

と返すが、しかしその顔は曇っている。こちらの問題に関わらせてしまったことに負い目を感じている。

『そう負い目を感じることはないよ、こちらにも打算はある』

勘の良い電話の主はそれに気づいて再度気にすることはないと念を押す。

『今回の件はあの子の成長に繋がると勘が言っているんだ』

平穏が好きなあの子にとっては勘弁してほしいと思うかもしれないがね。

と、電話のむこうで苦笑しているようだ。

『ううむ。では、彼がこちらに来たら手厚く協力しよう。こちらの問題にそれも身内の件で手を貸してもらうんじゃないからな』

『そうだね、そうしてくれるとこちらにも有難いよ。では、日時は○日の??時に――』

『うむ、ではのう。』

『C i a o』

ピツという音とともに通話が切れる。背もたれに背を預け、一息つく。

ふと周りを見渡すが周りには誰もいない。誰も老人のやり取りを見ていない。

「では、儂も木乃香に連絡せんとおう。次の見合いが決まったと」

また、トンカチで小突かれるんじやろうか？と、額に冷や汗を流す

老人——近衛近右衛門このえこのえもん

しかし次には顔を引き締め、イタリアにいる友人にもう一度感謝を。そしてこちら——麻帆良に来るであろう友人の後継者に望みを託す。

「ありがとう、IX世テイモツテオ。我が古き友よ——

そして頼むX世沢田綱吉くん。どうか木乃香を守ってくれ」

そんな祈るように両手を強く握りしめる近右衛門を満月だけが見ていた。

『チャオっす。九代目か』

『そうだ、私だよりボーン』

『新しい依頼か?』

『ああ、リボーンと

——綱吉くんね』

『ツナにもか?』

『ああ、詳細は送ってあるよ。そろそろつくはずだ』

『今来たぞ。……………これは』

『書いてある通りだよりボーン、古い友人からの頼みなんだ』

『しかたねえな、ツナには俺から話しとくぞ』

あいつは嫌がるだろうが、俺がおど、説得しとくぞ。それでもダメなら力付くだな』

『ハハ、お手柔らかにね。C i a o』

『C i a o』

「九代目もなかなか思いきったことするな、久々にたのしめそうだ

ぞ♪
「

ニツと小さき死神は笑う。

第1標的 ボンゴレ side 来る！

「んなっ！見合いいいい！！」

「そうだぞっ♪」

「そうだぞ♪っじゃないだろりボーン！俺は京子ちゃんが好きだつて言ってるだろ！なのに見合いい！京子ちゃんに知られたら誤解されるだろ！」

只でさえ、進展しないのに！と叫ぶのは沢田綱吉。

人よりダメダメだがそれなりに平凡な人生を送ってきた。が、とある家庭教師が来てから波乱万丈な人生に早変わりした哀れな少年だ。あだ名はダメツナ。

実は世界最大のマフィアであるボンゴレファミリー次期10代目ボスである。本人はまだマフィアに成りたくない！と拒否しているが。

「京子との仲が進展してねえのは、オメーがヘタレだからだろうがこのダメツナ」

と躊躇なく切り捨てる赤ん坊はりボーン。最強で最恐なヒットマンであり綱吉の家庭教師。

晴のアルコバレーノ最強の赤ん坊であったが綱吉の奮闘により現在は解呪済みであり、徐々に成長中。

黒のオーダーメイドスーツにボルサリーノ、ツバには相棒の形状記憶カメレオンのレオンが鎮座している。

「うっ」

心当たりがありまくる指摘に声が詰まる。確かに何度も進展のきっかけがあったのだが、肝心な所でヘタレたためチャンスをふいにしているのだ。

「だからって見合いはないだろ！オレまだ14だぞ！早すぎるだろ！」

「普通はな」

おめえの場合はちげえぞ。

「おめえは、ボンゴレファミリー次期10代目ボスだ。何かあった
ときのために子を残すのは重要なことだぞ」

「んなー！こつ、子どもー！そんなの尚更早いだろー！」

顔を真っ赤にするツナをしりめに、レオンをふくふくとした手に誘
導する。

すると、レオンは拳銃へと変態した。

「往生際が悪いぞ、諦めろ」

そしてツナの額目掛けて躊躇なく引き金を引く。

「うわー！」

なんとか避けることができた。チツと髪にかする、間一髪である。

「ほう、避けるのが上手くなったじゃねえか」

「危ないだろリボーン！そりゃああんだだけ射たれてれば避けれるよ
うになるよ！悲しいことに！」

避けたことを誉めるリボーンに怒鳴る。するとリボーンは踵を返
し、部屋の済みに置いてあるトランクケースに近づき開ける。そこ
にはトランク一杯に銃と弾丸が納められていた。

トランクに収まっている銃に手を添えたままツナに尋ねる。

「俺が世界最強のヒットマンってことはごそんじだよな」

「え、うん」

出会った頃から聞いてるし、今さら何を？という疑問が浮かぶ。

「片手間に撃ったとはいえツナ、おめえはそんな俺の弾を避けた」

「……………（汗ダラダラ）」

リボーンが一瞬にして両手に銃を装備、弾帯を交差するように纏掛
けにしている。

「まあ、おめえが避けれるようになったのは良いことだぞ。俺の弾
を避けれるのならそこらの暗殺者の弾は避けれる」

両手の銃をツナに向ける。この時点でツナの血に流れるボンゴレ
の血の力、超直感がガンガン警報を鳴らしている。

「ただまあ

俺のプライドがちよっと傷ついたぞ」

瞬間両手の銃をフルバーストし撃ちまくる。

「結局お前のプライドの問題かよ~~~~~!!!」

ひい~~~~~!!!

ツナの悲鳴が並盛の町並みに木霊する、通行人達が一瞬ビクツとするが表札を見てああ、いつものことかと直ぐ興味を無くし会社、学校へと歩を進める。

最早この悲鳴も並盛の日常である。

「つー訳で当たるまで撃つぞ♪」

「んな~~~~~!!!」

リボーンは再び広角少し上げこう言った

「Let's 死ぬ気タイム♪」

~~~~~

「はあ、はあ生きてる……………オレ、生きてるよっ」

「まさか弾切れまで避け続けれるとはな、本当に避けるのは上手く

なつたじやねえか」

ツナの部屋は酷い惨状になっている。壁、窓、家具あらゆるものに弾が貫いている。

当のツナは床に頭を抱えた状態で生存を喜んでいる。

リボーンは銃をトランクに収め、いつの間にか淹れたエスプレッソを優雅に飲みつつ、称賛を送った。若干含みはあるが。

「っーリボーン、お前なあ!!」

「話が進まねえ、黙れ」

立ち上がり食って掛かろうとするが、リボーンに蹴られ物理的に沈黙させられる。まさに、暴君。

「話を戻すぞ、この見合いは9代目の正式な依頼だぞ。断ることは出来ねえ」

「えっ、9代目から」

服の埃を払い、比較的綺麗な床に座る。やっと聞く体勢に入ったようだ。

ボンゴレファミリー9代目、ツナを10代目に選んだ人物である。また、リボーンも9代目の依頼でツナを立派なボスにするための家庭教師をしている。

「ああ、ついこの前に死炎付きの依頼書が送られて来たぞ。9代目にも直接確認したから本物だ」

これだぞ、と懐から1枚の紙を取り出し見せた。

文の上に橙色の炎が燃えながら揺らめく。恐る恐る橙色の炎に手を近づけると日溜まりのような暖かさを感じた。リング戦の時、9代目の指に灯された炎にも同じ暖かさを感じたことを思い出す。

「暖かい……。9代目の炎だ」

「死ぬ気炎の波長は人によって違う。だからこう言う9代目直々の依頼書等には死炎を灯すんだぞ。おめえはイタリア語読めねえから代わりに読んでやるぞ」

『やあ、綱吉くん久しぶりだね。病気などしてないかな？私は元気だよ。突然の話で心苦しいのだが私の古い友人の孫娘とお見合いを

してくれないかい？君に好きな人がいることは分かっている。だが、彼が珍しく真剣に頼んで来てね。付き合いの長い彼にそこまでさせておいて断るのは忍びない。お見合いをしてくれるだけでいいんだ、もちろん強制ではないから安心してほしい。

君に大空の加護があらんことを

ボンゴレIX世』

「だってよ」

「って強制じゃないって書いてあんじゃん！リボーンの話と違っちゃうじゃん！」

良かった、断れるくくと安堵しているツナを絶望に突き落とすリボーン。

「断れねえぞ」

「はあ！何で！」

「前にも言ったけどな、ボスの命令を断るのは裏切りと見なされて………処刑だぞ♪」

と可愛く恐ろしいことを言う。

「そうだったあああああ！前にもそんなこと言ってたあああああ  
!!」

嘘だろー！彼の虚しい叫びがまた並盛に響いて言った。

—————

時は過ぎ、お見合い当日。場所は麻帆良の料亭。ツナの心境とは裏腹に空は雲一つない快晴。絶賛のお見合い日和だ。

ツナは自身の部屋で寝ていたと記憶していたが起きたらそこは高級そうな料亭の一室。どうやら寝ている間に運び込まれたようだ。

ちなみに服もチェイスで着ていたスーツに変わっていた。

「はあ」

「溜め息をつく和幸福が逃げるぞ」

お前のせいだろ！と思うが今は反論する気力もない。

今は居た部屋はリボーンがツナを運び込むために取っていた部屋で、今向かっている部屋がお見合いに使うらしい。

「相手方はもうついているぞ、後はツナだけだ」

「うう、緊張してきた……………」

そんなこんなで部屋の前に到着。望んだお見合いではないが人生初のお見合いに緊張してきたようだ。障子を開ける手がプルプルと震えている。

「とつとと行ってこい」

「うわあー！」

そうしているとリボーンに蹴られ転がるように部屋に入らせられ

た。

「いてて……………」

「大丈夫」

痛がるツナの目の前に白魚のような手が差し出された。

「あつ、すいません」

謝りながら手を取り顔を見上げるとそこには

茶色がかった長い黒髪の優しそうな少女がいた。

## 第2標的 ネギま！side 来る！

「ふんふん、ふふ、ふんふふくん♪」

カードを切る音と共に少女の鼻歌が部屋に木霊する。この少女の名前は近衛木乃香。茶色がかった黒髪に前髪を一直線に切った姫カットが可愛い、大和撫子。少々物騒なところも有るが（汗）

ここ麻帆良学園の学園長、近衛近右衛門の孫娘である。

「おニユーのタロットカード〜」

ご機嫌の理由は新しく購入したタロットカードのようだ。占いグッズに目がない彼女らしい。

どうやら同居人であり親友の神楽坂明日菜と10才の少年でありながら木乃香達の担任であるネギ・スプリングフィールドは不在のようだ。

普段はネギと明日菜で賑やかな部屋だからか一人でいると少々寂しいらしい。つつい独り言が増えてしまう。

「何占おうか悩むな〜♪勉強？天気？運勢？うーん……………」  
新しく開けたのは良いが何を占うか悩んでいるようだ。

「そやー！出会いを占おう〜！」  
年相応の乙女らしいものに決まった。

タロットカードを正しい手順で準備し終わると、三枚のカードをクロスを引いた机に並べる。

結果は……………

「運命の出会い有り、や。きや〜っ！」

いやんいやん、と興奮し紅潮した頬に手をあて頭を左右に振る。

良縁が来るとでたようだ。

「ネギくんも無事試験合格出来たし、幸先ええな〜♪」

ネギの試験というのはまあ正式な教員になるためのものであり、その内容がかなり困難なものであった。麻帆良学園女子中等部2―Aをビリからビリから脱却させるというもの。

こういえば簡単そうに見えるが、2―Aにはバカレンジャーという不名誉な称号を与えられた5名が存在する。

成績上位者の貯金を使いきるほどの猛者たちだ。これによりビリを脱却させるのはかなり困難なことになる。

ちなみにさつき紹介した木乃香の同居人で親友の神楽坂明日菜もその1人、バカレッツドだ。

何だかんだで明日菜達、バカレンジャーと担任であるネギが試験当日まで行方不明になるなどの事件もあつたが無事ビリを脱却するどころか初の1位に輝くことが出来た。

結果オーライと言えよう。

と2年最後の3学期を思い返していると携帯から着信が来た。

開いて確認するとそこには『お爺ちゃん』と出ていた。

「もしもし〜」

『おお、木乃香。いきなりですまんが学園長室に来てくれんかの〜』

「ホンマ急やね。どうしたん?」

『頼みたいことがあつての〜、構わんか?』

「ええ〜(ちよつと、いやかなり嫌な予感がするなく。お爺ちゃんが頼みたいことをぼかす時は大抵厄介なことが多いし。お見合いとか)」

『頼む〜! 老い先短い爺のためを思つて〜!』

「んも〜、またそんなこと言つて。まだまだ元気やないの。わかつた。今からそつち行くね」

「しゃーないなく、と溜め息を一つ吐く。こういうときの近右衛門は頑固なのだ。

『おお! ありがとう! まつとるぞ♪』

「ついたらトンカチな♪」

『フオ!』

「ちよまつ、という焦った声を聞かず電話を切る。哀れなり近右衛門。」

「明日菜達そろそろ帰ってくる時間やったけど、入れ違いやね。書き置き残しとかんとなあ」



さらさらつと書き置きを残すと制服に着替え部屋から出ていった。

机に置かれた大空とデフォルメされたライオンのタロットカードが一瞬光ったように見えた。

—————

「ええ、また見合いやの〜」

学園長室に着いた木乃香は想像通りの頼みごとに不満の声を上げた。

「この前も凄い年の離れた人とお見合いやったやんか〜」

「許してくれ木乃香！ほら、年上の包容力とか魅力的じゃと思っただんじゃ！」

トンカチを取り出すと、慌てて弁明をするが全然弁明になっていない。包容力云々は分かるがだからといって一回り二回り年が離れた奴を持つてくるな。そいつロリコンだろ！全然安全じゃない。明日菜のようにオジコンではないから当然木乃香の好みから外れている。

この今にもトンカチで小突かれそうな老人こそ、麻帆良学園学園長ぬらりひよ、間違えた。ル○將軍、違う。近衛近右衛門その人だ。「ひどくない濃泣いちやうよ…」こいつ本当に人間か？と思うくらい伸びた後頭部が特徴だ。

木乃香に見合いをさせるのが半ば趣味になっており、その度木乃香を困らせている。(木乃香はその度トンカチで小突いているのだから懲りない)

その正体は関東魔法協会の理事長を勤めている学園最強の魔法使いである。孫を大切にしているのは確かであり、見合いを進めるものとある事情があるからだ。

「もう、お爺ちゃん！私ももう子供やないんよ！好きな人くらい自分で見つけられるて言いよるやん！」

頬をプクッと膨らませ不機嫌そうに近右衛門に言う。怒ってます！といった感じだか、可愛らしい。

「分かっておる」

と、近右衛門は突然顔を引き締め、噛み締めるように同意する。

「ど、どうしたん？」

祖父の変わりように驚く木乃香に近右衛門は続けて話す。

「分かっておるんじゃ、じゃがどうしても心配なんじゃ……。何か、あつたらと」

「儂も長く生きとるがいつ死ぬか分からん。儂が死んだあと、木乃香を守ってくれる者を探したいんじゃ」

普段の飄々とした態度は鳴りを潜め、慈愛と焦燥を混ぜたような眼を木乃香に向ける近右衛門。

何だかかんだで近右衛門のことを慕っている木乃香は安心させるように「大丈夫やよ」と言葉を放った。

「私には、親友の明日菜が居るし、クラスのみんなも居るし。まだ小さいけどネギくんもおるやん。セツチャンモ、それに不安そうなこと言うとするけどトンカチで小突いても死にそうにないお爺ちゃんも居るやん！大丈夫やっつて」

そう、少しも不安なんてないとふわりと微笑んだ。お日さまのように暖かくて包み込むような笑顔を。

それにつられて近右衛門の剣も和らいだ。

「やから、見合いしなくていいやね」

「ふおー」

が、自然に見合いを断ろうとする木乃香に焦ったもの変わる。

「待つとくれー！後生じゃー！爺、一生のお願い！」

「お爺ちゃん的一生は何回あるんよ、この前も言うてたやん」

「本当に、本当にお願いじゃ！この通りっ！」

と取りつく島がない木乃香に土下座を敢行する。威厳もなにもない。

「また、年の離れ過ぎの人とかやろ。嫌やで」

「今回は違うぞい！木乃香と同じ年の子じゃ！」

予想外の言葉に一瞬、木乃香の思考が止まる。オナイドシ？

「ホンマなん？」

と再度確認する。疑っている、無理もない。

「本当じゃー！これが今回の相手の写真じゃー！」

近右衛門に1枚の写真を渡される。今だ訝しく思いつつ、写真を見る。

そこには

原っぱで同じ年や年上、年下の人たちと笑いあう明るい茶髪の少年が写っていた。

少年は髪が重力を逆らうように逆立っており見方では爆発してい

るようにも見える。

転んだ状態で写っているが無様には見えず、何であろうか、少年のことを何も知らないというのに、らしいというか、少年の人柄が伺えるようだ。

彼の日常を見事に切り取った、写る人たちも心から笑っているのが分かる。1人、離れてブスツとしているが、見てる者の心にも幸福が訪れそうな1枚。

「わあ……」

「優しそうな少年じゃろ？」

写真を見て心がほんのりと暖かくなるのを感じた木乃香。

近右衛門も思わず声を上げる木乃香にそう問いかける。

「うん、ホンマに優しそうな人やわ」

「木乃香よ」

また、飄々とした態度を消し真剣な表情で何度目かの返事を問う。

「頼む、受けてくれんか」

木乃香はお見合いとか関係なくこの優しそうな少年に会ってみた  
と思った。

「ええよく、受ける」

「おお、本当か！では早速先方にも連絡するわい！」

いそいそと準備に取りかかる近右衛門。

「じゃあ、帰るなあお爺ちゃん」

「おお、気を付けてな」

扉に向けて踵返そうとして、ふと手に持ったままの写真に眼を落とす。

「なあお爺ちゃん、これ貰っていいん？」

「フオ？おお、良いぞ良いぞ」

ありがとなあ、と微笑み今度こそ踵返すと学園長室の扉から出る。  
不思議と持っていたくなかったのだ。

木乃香が部屋を出てから暫くしてから、近右衛門ははあ、と一息ついて椅子にドカツと座りこみ体中の力を抜いた。  
そして

「すまん、木乃香」

と噛み締めるようにように呟いた。

「ともあれ、彼と合流させるのは完了じゃ。次に移行せんとおう」  
続けてそう溢す近右衛門の顔は苦渋に満ちていた。

「……………」

「もうそろそろ来るぞい」

「はあ、緊張するなあ」

木乃香はドキドキと高潮する胸に手を持ってきて当てる。何気に  
同い年の人とお見合いは初めてであり、流星に緊張しているよう  
だ。

そう、時は過ぎお見合い当日となっていた。

梅の花をあしらった綺麗な着物に着飾っている木乃香はとても愛  
らしく仕上がっている。

そんな緊張している木乃香を近右衛門が微笑ましく見ていると、  
スツと障子が少し開いた。

「…(来たっ!)」

少々崩れた姿勢をピンと戻す。と、突然

ドカツ!

とした音とともに件の写真の少年が転がり込んで来た。

「うわあ!」

(わあ!)

少年と一緒に驚くが、いって、と溢す少年に慌てて手を差しのべる。

(写真と同じやあ…)

と、クスツと笑みが漏れる。

「大丈夫?」